Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

『夢十夜』の解釈と鑑賞 : 読みの方法を考える教材として（シンポジウム「国語教育の現状と課題」）

藪本, 勝治

(Citation)
國文論叢,49:30-33

(Issue Date)
2015-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011669

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011669

KOBE UNIVERSITY

シンポジウム「国語教育の現状と課題」

（平成二六年八月二三日開催）

近年、グローバル化が加速する社会情勢の中、二、三の大企業が会社内公用語として英語を制定し、英語教育が小学校でも実施され始めた。中・高等学校では、英語の単位数が増えた上に理科、数学が前倒しで新学習指導要領を先行実施し、そのあおりを受け、国語科の総授業時数が減り、国語教育は、やや軽視されている観がある。

平成二十五年から年次進行で実施されている高等学校新学習指導要領は、来年度完全実施となる。旧指導要領から新指導要領まで十年以上の間、国語科教育法（国語科教育論）を受講した多くの学生が、難関の教員採用試験に合格し、学校現場の荒波を受けながら骨太で魅力ある国語教師に成長した。まず、国語教育の現状ということで、四名の方の授業実践の報告を軸にシンポジウムを開催した。

一、『夢十夜』の解釈と鑑賞

―読みの方法を考える教材として―

藪本勝治

夏目漱石の『夢十夜』は、高等学校の国語科教材として「国語総合」の教科書に掲載されている。そのため日本の多くの高校生がこの作品に触れるわけだが、教科書では「第一夜」と「第六夜」が載せられることがほとんどである。しかし、きわめて多面的な小説である『夢十夜』から二話のみを取り上げて「教科書通り」の読みを導くだけでは、この作品の教材としての可能性を生かし切れないように思われる。むしろ、多様な解釈が可能であることを逆手に取って、全十話を通読することにより、様々な読みの技法を、具体的な実践を通じて紹介できるのではないだろうか。また、作品通読の中で、漱石を軸として、明治期の文学史的状況に深く触れることも可能だろう。本発表では、こうした目論見のもとに行った『夢十夜』通読の授業実践を報告した。

この授業で特に注意したのは、教師は問を発するに留まって後は生徒同士の議論に任せ、司会役に徹するということである。現代文、特に小説は何を教えたらよいかわからない、という声を耳にするが、教師の側がすべての答えを与えようとすると、生徒は主体的にその小説を読解する機会を失うだろう。生徒の自発的な授業参加を促すために、この授業ではひたすら生徒の思索を挑発

し、発言を拾い上げ、展開し、議論を盛り上げることを大切にした点は、本発表で最も強調したテーマである。

この授業は全十一回で構成されている。第一回で漱石に関する情報の整理、および『夢十夜』の紹介を行い、以下一回で一話ずつ読み進めてゆく。限られた時間の中で全話を詳細に読めるわけではないが、生徒の興味の鮮度が高いうちに通読できるという意味ではこの進め方にも一定の意義が認められよう。また、毎回ポイントを絞り、読みの技法や明治文学史についておさえていくという安定した授業が展開できる。そのポイントをひとまず一覧にすると以下の通りである。

第一夜：言葉の象徴的意味を読む。発表媒体と当時の読者の感覚。
第二夜：技巧的な心理描写。表現の妙を重視する『草枕』の文芸論との関連。
第三夜：時代・社会・作者の情報を踏まえて読む。小泉八雲との関係。
第四夜：言葉の象徴的意味を読む。前・後期三部作との関連。
第五夜：語りの遊戯を読む。自然主義文学の時流と漱石の位置。
第六夜：二項対立の整理。言葉の象徴的意味から「作者の主張」を読み取る。
第七夜：本文に寄り添い感情移入する読み方と批判的に距離を置く読み方の紹介。
第八夜：二項対立の整理。時代・社会・作者の情報による解釈。反自然主義の潮流。
第九夜：語りの遊戯を読む。解釈が一通りに確定できない例。
第十夜：二項対立の整理。言葉の象徴的意味。時代・社会・作者の情報による解釈。

さて、本発表では、「第十夜」を例に挙げ、具体的な授業内容を紹介した。「第十夜」は、「庄太郎が女に攫われてから七日目の晩にふらりと帰って来て、急に熱が出てどっと、床に就いていると云って健さんが知らせに来た。」と書き出され、女についていった「庄太郎」が、絶壁から飛びこまなければ豚に舐められますと言われ、豚を次々とステッキでたたいて谷へ落としたが、ついに舐められて気絶する顚末が語られる。実に荒唐無稽な話であるが、手がかりとなりそうな情報を得るためにも、この話に出てくるいくつもの小道具の同時代的な意味を理解する必要がある。したがって「第十夜」では、同時代の文脈を参照し、『夢十夜』発表当時の享受者が了解した言葉の意味の広がりを探り当てる読み方を実践し紹介することとなる。

授業ではまず、岩波の『漱石全集』から「第十夜」の本文と注を載せたプリントを配布する。本文は毎回このように作成したが、最初の「第一夜」は連載当時の朝日新聞での掲載面をあわせて配布した。明治期独特の漢字遣いとルビ遣いに浸らせることで、最初は戸惑っていた生徒たちも、次第に教科書的な「正しさ」の外側を受け容れ、現在とは異なる文化的環境から現在を相対化する視点を築いていったように思われる。次に、朗読CDを聴きながら内容を一通り把握し、とりあえず感想や質問を受け付ける。生徒はすでに「第九夜」まで読み進めてきているため、この時点でいくつかの発見ができている。たとえば、「こんな夢を見た」で始まっていない、一文目に出てくる「庄太郎」という人物は「第

八夜」でも出ていた、などである。しかし、感想としては当然「わけがわからない」「本当に意味を見出すことができるのか」といったものが多くなる。

そこで、第一の発問として、「『庄太郎』はどのような人物と書かれているか」という問を提起する。注を参照することで明らかになることであるが、「パナマの帽子」は当時流行したハイカラなファッションであるし、「水菓子」つまり果物を土産物として用いることも流行の風俗であった。また女の顔を眺めることを道楽としており、ステッキを手に持っているとの記述があることからも、庄太郎は、流行に敏感な趣味人の若者として描かれていることがわかる。このようにして確認した言葉の同時代的な意味を踏まえ、次に、絶壁に飛び込むか豚に舐められるかの選択を女から迫られるという展開に象徴される二項対立を整理してゆく。さらに、授業の最後には「第十夜」と「第一夜」の関連を読み解いてゆくことになるが、それらの解釈内容に関して発表当日には深入りせず、生徒が意見を言いたくなる発問の重要性を強調するにとどめた。なお、「第十夜」を含む全十一回分の授業は拙稿「『夢十夜』の解釈と鑑賞―読みの方法を考える教材として―」（『灘中学校・高等学校研究教育紀要』三号、二〇一三年三月）に詳述したので、そちらもあわせてご参照願いたい。

（やぶもとかつはる／灘中学校・高等学校教諭）

講評一

『夢十夜』は、『こころ』を次年度読むための漱石文学の入門としての役割をはたすことができる教材である。教材として採られているのは、「第一夜」と「第六夜」が多い。発表者の場合も「国語総合」で一年生を対象としている。名門灘高校ということで、生徒が優秀なので、漱石概論と『夢十夜』紹介を第一回に実施している。勿論、指導の方法としては、作者を作品外的条件として作者にとらわれない読みの方法もありえるが、『夢十夜』の享受が汗牛充棟ともいうべき中では、作者に結びつけることによって、生徒の読書の幅を拡げることができる。また、夢を題材にしたという枠組みの共通性だけでなく、「テーマや物語の構成要素において緩やかに連関」と捉え、全十夜を通読し、作品を楽しく主体的に読み、意見の交換の場を設けたことは、生徒の思考力と表現力を鍛え、集団的な想像力を練りあげることができた。

それは、「ひたすら生徒の思索を挑発し、発言を拾い上げ、展開し、議論を盛り上げることを大切にした」結果で、双方向的な素晴らしい授業の展開といえよう。その上、「各話のポイントを最小限に絞る」ことは読みの技法を方向付けて習得でき、バランスの取れた読解力指導となっている。「第一夜」は明治四十一年七月の連載当時の朝日新聞を配布し、「明治期独特の漢字遣いとルビ遣いに浸らせること」も、発表者の見識の高さを示している。

第十夜は、発表にあるように、全文と注解を『漱石全集　第十二巻』岩波書店、一九九四）から転写したものを配布している。庄太郎と女との出会いと女に付いて行った先が絶壁で幾万匹の豚との七日六晩の戦いが健さんの語りで語られる。発問も当を得たものである。林原先生から、注解の明治・大正の浪

曲師桃中軒雲右衛門について詳細に説明し、明治の雰囲気をもっと伝えるべきではないかというご指摘に対して、注解に足していくことを、これからの試みとしたいということだった。

二、自習教材「マスター古文」シリーズの作成過程とその成果

石堂有紀

一．はじめに

本稿は、自習教材「マスター古文」の作成過程と概要を報告するものである。

「マスター古文」は、京都書房からの提案で、現場の教員の授業のノウハウを盛り込んだ問題集を作ることを目的に、県立姫路西高等学校の松浦弘幹教諭が作成を引き受けた、高校生を対象とした自学自習のための教材である。松浦氏は、この問題集作成を県国語部会の仕事として、また若手教員の問題作成能力育成の場として位置付けられた。西播磨地区の三十歳前後の職員を中心に、他地域からの職員や四十歳前後のベテラン職員も数人集めて編集委員とし、会議を重ねて問題集を作ってきた。私は平成二十四年三月の発足時からこの問題集作成に参加する好機に恵まれた。

二．編集会議の実態

二・1　素材集め

会議は素材文集めから始まった。各ページにはテーマとなる文法事項があるから、その練習のできる文が入った話を探すのである。当初、創文社から刊行されていた問題集をベースに本文採録箇所を決めようということだったが、結局、創文社のデータからはシリーズそれぞれに数題ずつ入ったのみで、ほとんどは古典文学大系などをあたった。おもしろい話を載せたいというのは、出版社・編集委員双方の希望だった。おもしろいといっても奇をてらったものではなく、古文世界のよさを伝えるものである。

猿の母子の深い愛情と哀しみに胸を打たれて出家してしまった猟師の話。不細工な夫を嫌がって避けていた美人の妻が、夫の吹く笛の音を聞いて愛情を自覚する話。手当たり次第に投薬したヤブ医者の薬が偶然当たって回復し医者に感謝する男と、名医に予防薬をもらって発症せずにすみ薬は無用だったと医者を馬鹿にする男の話。妖怪の話、弓の名人の話、盗人の話、欲深僧の話。昔話の話型を踏襲したものが多く並んだ。崇徳院が怪鳥を呼ぶ恐ろしい話の採録が決まったときの編集委員の喜びようはなかった。おもしろいばかりではいけないので、たまには評論や随筆、歌論からも採る。ジャンルにバリエーションを持たせたいが、生徒の読解力を考えると最初のうちはどうしても説話に偏る。たかだか四百字ほどでストーリーに展開が必要である。生徒が理解しやすいように登場人物は極力少ない方が望ましい。所定の文法事項の解説に適していなければならない。素材文選びは一番楽しい作業であると同時に一番苦しい仕事でもあった。十四時に始まった会議が終わったのは二十三時を過ぎてからということは珍しくなかった。

二・2　問題の作成と検討

素材が揃うと目次を組んで担当者を決める。このシリーズは3